

村山民俗学会

第 400 号

発行日 2025 年 2 月 1 日

発行責任者 相原 一士

編集担当 岩鼻通明

会報 400 号を迎えて

野口 一雄

『村山民俗学会－会報合本復刻版－』（平成 16.6 原人舎）「あとがき」に、「村山民俗の会」設立、本会会報発行の経緯について、少し触れている。会設立時、事務局担当の私が会報発行を担当することになった。ワードプロセッサが使えるようになった頃である。題字「村山民俗の会」は月光善弘会長にお願いした。（現会報「村山民俗学会」も月光初代会長の筆になる。）ワープロ作成の原稿を切り貼りしながら、B5 版 1 枚の会報を作り続けた。その体裁の会報は 67 号まで続く。私は 120 号（114 号～120 号は事務局加藤和徳）まで担当した。会報の内容は事務局からの連絡や「短信」を中心とする、身近な情報提供や総会・研究発表会、研修会などの案内だった。

最初の現地研修は 87 年（昭 62）8 月 18 日、中山町岩谷十八夜観音祭礼に参加し、オナカマ山田ヨシノさんの神おろしを体験した。本会会誌『村山民俗』第 1 号にその時の写真が載る。同年 11 月 17 日、天童市仏向寺「踊躍念仏」の行事に参加。踊躍念仏伝承者でもある本会会員、松念寺住職川越兼章さんに案内していただいた。83 年（昭和 63）8 月 6・7 日、本会会員山形市遍照寺住職竹田憲正さんの案内で「山寺夜行念仏・磐司祭」に参加した。集合場所は石山三四郎（山寺講中石山和夫氏の兄）宅、こけし工人のお宅であった。この時期、文化庁からの依頼「盆行事の調査」を本会が受けた。その案内なども会報で紹介した。

会報 30 号（84.1.5）に、新聞コラム「追悼・坪井洋文氏 民俗学の現状に鋭い危機感」を載せた。氏が指摘した強い危機感は、20 年経った現在どのような状況下にあるのだろうか。下記の記事である。

雑誌「未来」九月号は、今年六月五十八歳で亡くなった民俗学者・国立歴史民俗博物館教授坪井洋文氏の追悼特集号だった。（略）坪井氏は派手な人ではなかった。「終始一貫啓蒙的な仕事を避けていた傾向がある」（宮田登氏）。いわゆる柳田ブーム、民俗学ブームに意識してのろうとせず、その間、「じっくりフィールドで理論構成に取り組んでいた。」氏の存在が一般に知られるようになるのは『イモと日本人』（1979）の出版によってであったろう。柳田国男に率いられた日本の民俗文化イコール水田稲作文化論への、民俗学の内部からの批判であり、周囲に与えた衝撃は大きかった。（略）八二年には『稲を選んだ日本人』を著して、前著の主張をさらに深めた。（略）網野善彦氏は、氏との交渉を通じて、「歴史学と民俗学という二つの学問の壁を乗り越えうるという確信」を持つことができた、という。（以下、略）

国立歴史民俗博物館開館 10 周年の年、坪井先生から『民俗再考-多元的世界への視点-（昭 61.12 日本エディタースクール）をいただいた。巻末の初出一覧である。